

井上靖断想

古山 登

テレビのクイズ番組で「一〇〇人に聞きました」というのがあった。昭和五十四年四月にスタートし、平成四年九月に終わるまで、十二年六カ月にわたって放映された長寿番組で、TBSの人気クイズ番組として親しまれていた。内容は一つのテーマについて、例えば「世田谷の三軒茶屋で主婦一〇〇人に聞きました」とか「有楽町でサラリーマン一〇〇人に聞きました」といったふうに、一定の地域で、一定の階層にアンケートし、その返答の多いもの幾つかを出場者に当てさせる、という趣向であった。そして、番組終了の間際に、「男女高校三年生一〇〇人に聞きました——日本の近代文学で文豪と言われている作家を挙げて下さい」というのがあった。答えは、一位夏目漱石53人、以下②森鷗外10、③芥川龍之介8、④川端康成8、⑤谷崎潤一郎4、⑥太宰治4、⑦井上靖3、その他少数意見10というものであった。その他少数意見とは、それぞれ一票ずつの同数八位でこれが十名、計一〇〇人ということであった。

そこで、この一〇〇人よりは、二、三歳年上の本校の学生ならばどういふ結果が出るだろうかと思ひ、文芸科マスコミ・コースの二年生を対象に同じ設問を試みた。調査人員は一五名、回答者八六名、無回答二九名であったが、一位は矢張り夏目漱石で38票、以下②芥川龍之介14、③志賀直哉・太宰治各13、⑤川端康成・森鷗外各12、⑦谷崎潤一郎9、⑧井上靖・遠藤周作各7、⑩泉鏡花・坂口

安吾・樋口一葉・掘辰雄各4、その他という結果が出た。

参考までに「その他」も記しておく、三票が井伏鱒二・尾崎紅葉・三島由紀夫・宮沢賢治の四名、二票が有島武郎・尾崎一雄・小林多喜二・野上弥生子・二葉亭四迷・安岡章太郎の六名、井上ひさし・内田百閒・大岡昇平・開高健・菊池寛・幸田露伴・佐藤春夫・里見弴・島崎藤村・芹沢光治良・武田泰淳・坪内逍遙・徳田秋声・徳富蘆花・野間宏・林芙美子・松本清張・村上春樹・山田詠美・山本周五郎・山本有三の二十一名が各一票ずつで、回答者と「文豪」の数が合わないのは、一人で何名も連記した学生が多く居たことによる。

そこで両者を比較してみると、当然のことながら、共通点もあれば差異もあることが分る。

先ず、共通点について言えば、第一に、両者共夏目漱石が二位以下を大きく離して一位に位していること、第二には双方の上位に顔を出している森鷗外・芥川龍之介・川端康成・谷崎潤一郎・太宰治・井上靖等は、漱石を含めていずれもその作品の一部が高校の国語教科書に収録され、授業でも著名作家として紹介・解説されていることである。

次に、差異について言えば、本校調査では三位に位している志賀直哉が、彼の場合も前期の諸作家同様、高校国語教育で著名作家と

して紹介・解説されているにもかかわらず、高校生の「一〇〇人——」では姿を見せていない（「その他」の中に居るのかも知れないが）ことである。もう一人八位の遠藤周作については、この年の文芸科行事「文芸学会」での講師が彼であり、彼の文学的実績に関するPRが行きとどいた影響が強かったと思われるので、こういう差異が現れたとしても不思議はないが、志賀直哉の場合は理由が判然としなただけに奇異である。

奇異と言えば、井上靖が双方のベスト・テンに堂々と姿を見せていることもやや意外の感がないでもない。とはいっても、別に井上靖の文学的実績を否定しようということではなく、大体、「文豪」という言葉自体「文章・文学にぬきんでている人。文章・文学の大家」（『広辞苑』）という曖昧な規定だから、改めて井上靖が文豪の名に値するかどうかを論議することは意味の無いことだし、またその気もない。ただ、夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、谷崎潤一郎など明治・大正の作家の場合は、評価の基準が作品だけに限定されているのに対し、昭和作家、殊に戦後作家の場合は、作品以外の要素、即ち社会的地位といったものがかなり影響している事実は否定できない。そして、その代表的な存在が井上靖であり、彼が、漱石、鷗外、芥川、谷崎などと並んで、「文豪」と併称されることに意外感を感じる理由もそこにある。

※ ※ ※

実際、井上靖の経歴は実に輝かしい。

まず、作家としては、昭和二十五年、四十二歳の折り、「闘牛」により第22回芥川賞を受賞したのを手始めに、「芸術選奨文部大臣賞」（昭33「天平の甕」）、「芸術院賞」（昭34「氷壁」その他）、「毎日芸術大賞」（昭35「敦煌」）、「楼蘭」（昭36「淀どの日記」）、「読売文学賞」（昭39「風濤」）第一回「日本文学大賞」（昭44「おろしや

国酔夢譚」）、「菊池寛賞」（昭55「シルクロードに関する踏査」）、「NHK放送文化賞」（昭56）第十四回「日本文学大賞」（昭57「本覚坊遺文」）、「朝日賞」（昭60「長年にわたる文学上の業績と国際文化交流への貢献」）再度「野間文芸賞」（昭64「孔子」）等、優れた大衆文学に与えられる「直木賞」、「吉川英治文学賞」、「山本周五郎賞」を除く総ての文芸関係のメジャーな賞を受賞して居り、同時に、これらの賞の選考委員の一人として優れた作品の顕彰に努め、また多くの『文学全集』の編集委員として参加、日本文学の普及に大きく貢献している。

さらに指導的文化人として、日本文芸家協会理事長、日本ペンクラブ会長の立場で思想・言論の自由擁護と日本文化の発展に尽くし、日本芸術院会員、文化勲章受章という文学者として最高の栄職を受けた。

国際的にも、日中文化交流協会会長、日仏文化会議（日仏十人会）、日米賢人会議等で日本の知識人を代表していわゆる『国際文化交流』に努め、特に昭和五十九年には日本ペンクラブ会長として第47回国際ペン大会を東京で開催し、高い評価を受けた。

その他、日本近代文学館名誉館長、国際ペンクラブ副会長、沼津市名誉市民、ポルトガル政府からの勲章授与、沼津市郊外駿河平、伊豆湯ヶ島、旭川等に建てられた井上靖の功績を讃える『井上靖文学館』、全国所々方々に建立された数多い文学碑等々、作家・文学者としての井上靖を顕彰する事項は枚挙にいとまがない。『文豪』たる条件は完全にそろっていると云っていいだろう。これだけの栄光を一身に集めた作家は空前だし絶後だろうからである。

※ ※ ※

井上靖がこれだけ一身に栄光を集めたのは、奈辺にあるのだろうか。まず、その生い立ちから追及してみよう。

井上靖は、明治四十年、北海道・旭川の陸軍官舎に生れたが、一歳の時軍医であった父親が朝鮮に出動したため母方の郷里である静岡縣伊豆湯ヶ島に移り、翌年やはり父親の転任で静岡市に住むことになるが、静岡在住九カ月で、妹生誕により父母の許を離れて再び伊豆湯ヶ島に戻る。三歳時であった。井上家は、代々医家で、地方医家としては伊豆一円に知られる名家であったが、湯ヶ島に戻った靖は曾祖父の妾で戸籍上の祖母となった、血の繋がりのない女性（かの）の手により、井上家の土蔵の中で育てられた。以後、三歳半の時再度父親の移転に伴い東京で住むことになった父母の許に引き取られるが、東京生活も僅か一年で三度び湯ヶ島に戻って湯ヶ島小学校に入学、小学校を卒業するまでこの地での育てられる。この幼年時代の生活は、「グウドル氏の手套」「あすなる物語」「しろばんば」「幼き日のこと」などのいわゆる自伝小説で叙情的に描かれている。

少年靖が三度び湯ヶ島を離れたのは十二歳の大正九年であった。この年一月に祖母かのを喪い、二月中学受験のため父親の新任地である浜松市の浜松尋常小学校に転校、静岡県立浜松第一中学校を受験するが、失敗、止むなく浜松師範付属高等小学校高等科一年に一年間通うことになり、住居も父母の住む浜松に移す。

以下、福田宏年編纂の「井上靖年譜」に拠り大学卒業までを編年史風に記すと――

大正10年（一九二一年、14歳）

四月、静岡県立浜松第一中学校に首席で入学。父は満洲守備に出動する第五師団とともに従軍。この年、静岡県下の中学校の優等生を集めた選抜試験で一等賞を取る。

大正11年（一九二二年、15歳）

四月、父が台北衛戍病院長に転任したため、静岡県立沼津中学

校へ転校。静岡県三島町（市）の、父隼雄の姉うめの嫁ぎ先、間宮家に下宿し、一里（三・九km強）の道を通学する。

大正12年（一九二三年、16歳）

特記事項なし。

大正13年（一九二四年、17歳）

成績が下ったため、四年生の四月より、沼津市下河原町の妙覚寺に預けられる。この頃より文学好きの友達と交わり、飲酒喫煙を覚え、同時に文学への眼も開かれる。図画と国語の教師前田千寸より国語の時間に芥川龍之介や谷崎潤一郎の短編を読まされ、感銘を受ける。この頃のことは「あすなる物語」「夏草冬濤」に詳しい。この年の夏休みに、父の任地台北に行く。

大正14年（一九二五年、18歳）

三月、山形高等学校を受験したが、途中で試験を放棄。（筆者註・旧学制では、卒業一年前の中学四年終了で高等学校への入学が認められていた）

四月、五年生になるとともに、学校の寄宿舎に入る。秋、気に入らぬ舎監を締め出して一晩中ストームで騒ぎ立てる事件を起こし、首謀者の一人として、寄宿舎の近くの農家に預けられ、教師の見回りと監督をうける。

大正15年（一九二六年、19歳）

静岡高等学校を受験するが、これも途中で放棄。三月沼津中学校を卒業後、父の任地台北に行く。

八月、父の金沢への転勤で金沢に移り、高等学校受験の準備に過す。この頃の生活は「北の海」に詳しい。

昭和2年（一九二七年、20歳）

四月、金沢の第四高等学校理科甲類に入学。家が代々医家であったため当然医者になるつもりで理科を選んだ。（筆者註・甲類

は理工系で、医者になるためには乙類を選ぶのが普通) 入学と同時に柔道部に入って選手生活を送り、専ら無声堂(この建物は現在愛知県犬山市の明治村に移築されている)での練習生活に明け暮れる。この年、徴兵検査を受けて甲種合格となったが籤逃れとなる。(筆者註・籤を引いた結果、徴兵検査には合格しても、実際には軍務に就かないで済む制度があった)

昭和3年(一九二八年、21歳)

一月、静岡三十四聯隊に入隊。四高始つて以来とのことで校長はじめ全校の歓迎を受けるが(筆者註・昭和18年のいわゆる「学徒出陣」までは、学生・生徒には、卒業まで入隊を猶予されるという特典があった)、入隊前に柔道の練習で肋骨を折っていたのが治りきっておらず、四カ月で除隊となったため、丁度五月に起つた済南事変への出動をまぬがれる。

七月、インターハイに出場。当時の高校柔道会は四高と六高(岡山)と松山高등학교で覇権を争っていた。十七日、松江高等学校との準々決勝で、四番目に出た靖は二人を倒して三人目で引き分け、四高が勝つ。十八日の準決勝で四高は松山高등학교と対戦して敗れたが、靖は当時高校柔道界で強豪として有名だった松山の中野二段と対戦して引き分ける。これは柔道生活中一番印象に残る試合であった。この年、父が弘前第八師団軍医部長に転任したため、金沢市桜島の下宿に移つて通学する。

昭和4年(一九二九年、22歳)

柔道の練習時間のことで先輩と衝突し、三年生のはじめに責任を取つて柔道部を引退。この頃より詩作をはじめ、富山県石動町の詩誌『日本海詩人』(主宰者・大村正次)に投稿し、二月号に井上泰のペンネームで「冬の来る日」と題する詩が掲載されたのを始めとして、相次いで採用掲載される。同じ頃、東京の

詩誌『焰』(主宰者・福田正夫)の同人となる。

十一月、高岡の同人雑誌『北冠』(主宰者・宮崎健三)の創刊に加わる。また、この年しばしば『高岡新報』に詩が掲載される。筆者註・この年発表された詩編は二十五編。

昭和5年(一九三〇年、23歳)

三月、第四高等学校を卒業。九州帝国大学(現九州大学)を受験したが失敗。

四月、同大学法文学部英文科に入学。三カ月ほど福岡市唐人町に下宿したが、登校の興味を失つて上京し、市外(現豊島区)巢鴨町上駒込(現駒込六丁目)の鈴木という植木屋に下宿して、文学書を濫読する。

十二月、白戸郁之助等と同人雑誌『文学abc』を創刊して、靖の本名で詩を発表する。

筆者註・この年発表された詩編は二十九編。

昭和6年(一九三一年、24歳)

この頃、詩誌『焰』の同人として、京王線笹塚に住んでいた福田正夫の家に通い、詩作に専念する。文学青年であった下宿の長男を介して辻潤を知り、また人を介して萩原朔太郎に面識を得たのもこの頃である。

九月、満洲事変勃発とともに、静岡三十四聯隊に入隊したが、間もなく除隊。この年、父は軍医監、陸軍軍医少将(筆者註・軍医の最高位は中将)に昇進して退職し、郷里湯ヶ島に隠退。

筆者註・この年発表された詩編は六編。

昭和7年(一九三二年、25歳)

三月、九州帝国大学を退学し、四月、京都帝国大学(現京都市文学部哲学科)に入学、美学を専攻して植田寿藏博士の教えを受ける。京都市左京区吉田神楽岡町の橋本家に下宿。これよ

り卒業までの四年間すこぶる怠惰な学生生活を送るが、着実に詩作は続けて行く。

三月、『新青年』一月号に掲載された平林初之輔の未完成の遺稿、探偵小説「謎の女」の続篇が一般より募集されたのに、冬木荒之介のペンネームで応募して当選、同誌三月号に掲載される。

四月、平凡社の『江戸川乱歩全集』の付録『探偵趣味』の小説募集に「夜霧」を冬木荒之介のペンネームで応募して入選、第十三巻の付録『探偵趣味』に掲載される。

筆者註・この年発表された詩編は四編。

昭和8年（一九三三年、26歳）

九月、『サンデー毎日』の懸賞小説に沢木信乃のペンネームで応募した「三原山晴天」が佳作入選。この作品は大阪の劇団「享楽列車」で劇化され、十一月大阪角座で上演された。

筆者註・この年発表された詩編は九編。

昭和9年（一九三四年、27歳）

三月、同じ沢木信乃のペンネームで「初恋物語」が『サンデー毎日』の懸賞小説に入選（賞金三百円）。

四月に、「初恋物語」が『サンデー毎日』四月一日号に掲載されるとともに、懸賞小説連続入選の技量を買われて新興キネマ（筆者註・戦時企業統合により、大映に統合）に誘われ、四月二十日付で在学のまま脚本部に勤務することとなり、月に一回上京するようになった。そのために中野区宮園町に部屋を借りる。秋、京都市上京区等持院西町三五、等持院アパートに移る。

筆者註・この年発表された詩編は五編。

昭和10年（一九三五年、28歳）

二月、建国祭本部の募集した映画筋書に「元寇の頃」を応募し

て、四等選外佳作となる。（筆者註・この時、初めて応募作品が選外となる）

三月、卒業試験を放擲する。

七月、初めての戯曲「明治の月」を『新劇団』創刊号に発表。

八月、哲学科の友人と同人雑誌「聖餐」を創刊、創刊号にそれまでに発表した詩の中から自信作をまとめ、「梅ひらく」「裸棺園」「二月」「落魄」「破倫」の五編を選び、新作二編「無題」「小鳥死す」を加えて、七篇を掲載。

九月、『サンデー毎日』の懸賞小説に井上靖の本名で応募した推理小説「紅荘の悪魔たち」が入選、十月二十七日号に掲載される。

十月、「明治の月」が新橋演舞場で、守田勘弥、森律子等によって上演される。

十一月、京都帝国大学名誉教授足立文太郎の長女ふみと結婚、京都市左京区吉田浄土寺（現在は神楽岡町に編入）に新居を構える。

筆者註・この年発表された詩編は八編。

昭和11年（一九三六年、29歳）

二月、東京池袋の旅館で、初めて映画監督野淵昶あきらと共同で、徹夜で尾上伊太八をシナリオに書き、夜が明けたら雪で、宿の女中から二・二六事件を知らされた。このシナリオは映画にはならなかった。

三月、京都帝国大学を卒業。卒業論文は「ヴァレリーの純粹詩」であった。

四月、『聖餐』三号を刊行し、この号で廃刊となる。

七月、井上靖の本名で『サンデー毎日』の長篇大衆文芸募集に応募した「流転」が入選、千葉亀雄賞を受け、賞金千円を貰う。

八月、「流転」入選が機縁となり、岳父足立文太郎の知人で毎日新聞京都支局長の岩井武俊の斡旋で、一日付で毎日新聞大阪本社に入社、芸芸部内にあつた『サンデー毎日』編集部勤務となり、新興キネマを退社。

十月、長女幾世生れる。西宮市香櫛園川添町に居を構える。

筆者註・この年発表された詩編は三編。

その後は、昭和二十六年四十四歳で退社するまで十五年間、創作を続けながら毎日新聞に在籍、昭和二十四年四十二歳で「獵銃」を提げて文壇に登場、続けて発表した「鬪牛」により同二十五年第22回芥川賞を受賞（既述）してからは正に栄光の道をひたすら歩みつづける。

それにしても、何と起伏に富み、波瀾に満ち、パフォーマンスな少青年時代であることか。修学年限一つとってみても、最短なら十五年（小5中4高3大3）、順調なら十七年（小6中5高3大3）で済むところを、井上靖は二十二年かかっている。

※ ※ ※

因みに、漱石、鷗外、芥川、谷崎の場合はどうか。

夏目漱石 慶応3（一八六七）〜大5（一九一六）東京生れ。東

京府立第一中学校（現都立日比谷高校）から二松学舎（現高校）に転じて漢学を修め、大学予備門（後の第一高等中学校・第一高等学校）を経て、大学本科（後の東京帝国大学・東京大学）に進み、英文学を専攻した。卒業後はロンドンに留学、帰国後は第一高等学校・東京帝国大学で「英文学」「文学論」を講じた。文学者としては早くから漱石山房の主として一家を成していたが、作家としての出発は比較的遅く、明治三十八年（一九〇五年）38歳時であった。処女作は、「吾輩は猫である」。

森鷗外 文久2（一八六二）〜大11（一九二二）島根県津和野町

（市）生れ。津和野藩の藩校養老館で修学し、実年齢13歳（公称は15歳）で第一大学区医学校（現東大医学部）予科に入学、同校本科を卒業したのは明治十四年（一八八一年）、鷗外20歳（公称は22歳）の時であった。卒業後はドイツに留学、滞独中、文学、哲学、美学、芸術に心をひそめ、帰国後評論活動と並行して創作にも手を染め、「舞姫」「うたかたの記」等の秀作を次々に発表、たちまち文壇に重きをなすことになった。時に明治二十三年（一八九〇年）、漱石同様、小説家としての登場は比較的遅く、28歳の時であった。

芥川龍之介 明25（一八九二）〜昭2（一九二七）東京生れ。東京府立第三中学校（現都立両国高校）から成績優秀のため無試験で入学した第一高等学校を経て東京帝大へ進み、在学中既に「老年」「羅生門」「鼻」などの秀作を発表、新進作家としての地位を確立している。処女作「老年」を発表したのは、龍之介実

に22歳という若さであった。

谷崎潤一郎 明19（一八八六）〜昭40（一九六五）東京生れ。東京府立一中から一高、東京帝大国文科と最エリート・コースを歩んでいる。尤も、早くから小説家志望を固めていたこともあって余り登校せず、その上授業料も滞納したので中途退学したが、「刺青」「麒麟」を発表したのは明治四十三年、潤一郎は24歳の帝大生だった。

こうして見て来ると、神童・大秀才と持て囃され順調にエリート・コースを着々と歩み、二十代前半にして早くも一際高く頭角を現した四人の「文豪」の輝かしい足跡と、井上のそれとの違いがよく分かる。年代の近い川端康成や太宰治にしても、

川端康成 明32（一八九九）〜昭和47（一九七二）大阪生れ。一高、東京帝大で文学を修学するが、文壇の注目をひいた「招魂

「祭一景」を発表したのは大正十年、時に康成21歳という若さであつた。

太宰治 明42(一九〇九)―昭23(二九四八) 青森県金木村(町)生れ。地元の弘前高校を経て東京帝大仏文科に進むが、中学生時代から「お花さん」と題するユーモア小説を発表するなど神童の名を恣にしていたし、今日なお読み継がれている。「道化の華」を発表したのが昭和十年、太宰26歳の秋であつた。

もちろん井上靖とて、非凡の器であつたことは間違いない。県下の優等生を集めた選抜試験で一等賞を取つたのは「秀才」の証の一つであるし、学生時代に幾つもの商業雑誌の小説募集に応募して次々に当選している事実は、文才の並々ならぬものであつたことを表している。ただ、井上靖が他の「文豪」たちと一つ異つているところは、「文豪」たちがいずれも直線的に「純文学」に入つていゝるのに対して、井上靖は、本格的に作家として登場する以前に、探偵(推理)小説、大衆時代小説、文学としては一段低い分野とされていた「大衆文学」や映画のシナリオなどに手を染め、大きく廻り道をしていることである。尤も、このことは後の井上靖にとって、小説の構成の一面としての「物語」の作り方の伎倆養成には大いに役立つという評者も居り、強ちマイナスであつたとばかりは速断できぬが、いずれにしても、井上靖が他の「文豪」たちと一味違つた「文学的生い立ち」の持主であることは否定できない。

しかし、漱石、鷗外、芥川、谷崎等を引合いに出して、井上靖が「文豪」であるかどうかを論議することにどれ程の意義があるだろうか。

第一、漱石・鷗外の時代、芥川・谷崎の時代、井上靖の時代とては、文壇的環境がまるで違ふ。漱石や鷗外が生き文学に勤しんだ明

治時代はヨーロッパの文明・文化に少しでも追いつこうと懸命であつた時代で、漱石や鷗外などの文学者というのは漢学の素養の上にヨーロッパの新知識を積み上げた数少ない先覚者であり、同時代の読者も亦、ごく限られた知識人に限られていた。芥川や谷崎の大正時代にしても、「大正デモクラシー」と云われるように欧風の思想・学問も日本的に消化され、まだまだ生硬ながらそれなりに日本的な形で成熟し開花しはしたものの、芸術としての文学は大衆からは遠い存在であつたし、小説家は体制外に居住し、異端視されていた。それが昭和に入ると、受難の時代を経て、「戦後」になる。「戦後」とは、日本で初めて思想・言論・表現の自由が憲法に明記され、「文化国家」が宣告され、「文士」が社会的に市民権を与えられ、文学賞が簇生した時代、そしてその頂点に立つたのが井上靖だと云つたら言い過ぎであらうか。

つまり、漱石・鷗外、芥川・谷崎、井上靖はそれぞれに異つた時代を代表する小説家であつて、その限りでは、一〇〇人の高校生も本校の学生諸君も正しい選択ということになるが、一方、時代時代には大きな格差があり、彼らを同一線上に並べて評論したり、序列をつけることが、無理なことであり愚挙であることも事実であらう。

にも拘らず、テレビのクイズ番組という軽薄で無定見な企画を基に軽はずみにこのような稿を起こした筆者は責められねばならないが、意図は、決して、テレビの番組作成の趣旨に添おうとしたのではない。むしろ、栄光という外装によつて十重二十重にくるまれている、井上靖という作家の近代文学、現代文学、戦後文学に於ける位置付けを正確に行いたいとの意図から本稿を思い立つたのであつた。と云うのは、戦後の「文化」現象では、作家は作品以外のことがよく知られて居り、作品以外の要素で評価されることも屢々ある

からだ。明治・大正の作家はせいぜいポルトレート程度しか一般に知らされることはなかったが、現在の作家は、歪みながら異常に発達したジャーナリズム・マスコミによってその容貌ばかりでなく、趣味、経歴、身辺のことなどがゴシップも交えて、時には作品に関することに多くの情報が読者に提供される。読者は読者で、専らその作家の知名度によって作品を選び、作品解説や著者紹介に導かれて読む、と云うより知る。つまり、読者は作品に対して感動することなく、文学若くは作者・作品に就いて知識を蓄えるだけという結果になり、作品の本質に迫るよりもその周辺を撫で回すだけになる。こうした作業の繰返しによって、読者は作者のイメージを作り上げて行き、時には実像を異常に拡大したり歪曲して、或いは偶像化し虚像を築き上げる結果を招く。井上靖が、バランスのとれた良識派文壇の紳士、世界的文化人、オールラウンドの知識人などという完成された人間像に対する賛辞で『文豪』にのし上った理由の一端もその辺りが大きく影響しているようだ。

※ ※ ※

では、井上靖とはどのような作家であつたのだろうか。

先にも記した通り、井上靖が大型新人として文壇に登場したのは、「猟銃」「闘牛」であつたが、「闘牛」の主要作中人物、津上は新興の新聞社の編集局長で、郷里に疎開させたままの妻子がありながら、さき子という愛人とも交際している。今の言葉で云えば、いわゆる「不倫」である。そんな彼が賭けているのは、新聞社主催の「闘牛大会」であつた。これは彼自身の企画で、情熱的、行動的に推進するが、なかなか順調に進まない。大会が始まってからも連日雨でこの企画の失敗が予想される。しかし開会三日目によく晴れて、牛の死闘が演じられる。そして、さき子は、この試合の勝敗に津上との愛を賭けたが、津上自身は自分が一体何に対して賭けていたのか

分らない。

この人物像は、「風林火山」の山本勘助、「水壁」の魚津、「天平の甕」の鑿真がくじんと五人の留学僧、「蒼き狼」のジギスカン、「風濤」のフビライ、「本覚坊遺文」の千利休等にも通じるもので、いずれも、井上靖の「挑む男」「闘う男」のポエジーを見事に表現している。そして、これらの作品の魅力が、これらの男たちの「挑戦」「闘争」の結果に何ら目的も勝利も報奨も期待していないことで一層重みをましていると云つていいだろう。

ところで、井上靖自身はどうであつたか。前述の通り、井上靖は数々の文学賞を授与され、ノーベル文学賞こそ逸したが、文学者・文化人として最高の榮譽に輝いた。しかし、それらはいずれも自ら求めて得たものではなく、先方が勝手にやつて来た、云わば単なる結果にしか過ぎなかつた。最高の榮譽を極め、食道癌の手術を受け（昭61・七十九歳）、担当医から厳しい療養生活を命じられながら翌年には、パリや中国を訪ね、畢生の大作として顕彰された「孔子」（昭62・51平1・5『新潮』）を執筆していることが証明している。「そこに山があるから登るのだ」という言葉があるが、井上靖は「そこにテーマがあるから書く」姿勢を生涯貫いた作家と云えるだろう。井上靖は、必ずしも『文豪』とは云えないが、戦後文学最大の巨人と称することに、私は吝かではない。

（後記）

昭和二十五年に、久々に郷里湯ヶ島から家族を呼び寄せ品川区大井森前町に一戸を構えた井上さんを初めてお訪ねしてから逝去された平成三年まで四十年間、その間遠くなくなり近くなったりしなから私は井上さんにお付き合ひさせていただいた。松江、金沢、京都、小樽、旭川などの各地を一緒に旅行もした。大勢の仲間たちと幾度も穂高登山に参加した。ゴルフのお供をすることも多かった。夜の

席を共にしたことは何十回、いや何百回に及ぶかも知れない。そして、よく思ったものだ。井上さんは「偉く」なり過ぎた、と云うより「偉く」され過ぎた、と。

井上さんは、初めてお会いした時から既に大家の風貌を備えていた。そして、賞を受ける度に威厳を増し、やがて文壇内外の重鎮になって行った。それに連れて、周囲は段々距離を置くようになり、いつか作家としてより名士として畏敬と尊崇の眼差しだけを向けられるようになってしまった。

では、当の井上さん自身はどうであったかと云うと、井上靖という人は、気さくで、心遣いが細かくて、朴訥率直、剛気な性格で、余り名利や格式には拘泥わることのない方だった。殊に食事に就いては、相手が勝手に美食家と極めつけて、招いてくれる超一流店の料理よりも、鰻井や牛井などの方が余程好みの方だった。文化勲章なども受けるには有難くお受けしたものの、勲章そのものには余り関心が無いようで、お孫さんが玩具にして遊んでいるのを黙って見ていた。

ただ、仕事に対する姿勢は頑固と云ってもいい程で、決して妥協しようとはしなかった。例えば『群像』に連載した「本覚坊遺文」の場合、連載を約束してから実際に連載を開始するまで十年かかっている。その間、担当者は勿論代々の編集長（十年間に編集長は三人変っている）も編集担当役員も、云わば講談社を挙げて督促に努めたが、井上さんは待たせつづけた。「怪び寂び」の利休ではない納得の行く「闘う茶人」のイメージ構築を十年間模索しつづけたのである。正に驚異的に強靱な作家根性と云っていいだろう。

「孔子」の場合には些か情況が違う。「本覚坊遺文」を書き上げた時、既に七十四歳になって居り、残った時間は三つの作品だけに絞ることになった。一つは未完の長編「わだつみ」（第一部昭41・1〜43・

1 『世界』、第二部昭44・1〜46・2 『世界』、第三部昭47・5〜50・12 『世界』、一〜三部昭52・12 岩波書店刊、六部完結予定）の完成と「孔子」「敗戦と新聞記者をテーマにした長編」の三作であった。（因みに昭和二十年八月十五日付『毎日新聞』の終戦記事を書いたのが井上さんである）しかし、その計画を実行する以前に井上さんは癌に襲われ、大手術を施されることになった。（昭61年・9、七十九歳）手術は成功したが体力の極端な減退は目に見える程痛々しかった。残された時間が少なくなったことは自他共に認識された。そこで井上さんは最も困難な「孔子」に取りかかった。術後僅か半年後であった。（昭62・6〜平1・5 『新潮』）そして「孔子」脱稿後二年足らずで大往生された（平3・1・29）のであるが、その気魄にはただただ敬服するばかりであった。

私が本稿で書きたかったのは、一般に受け取られているような、ソフトで、一流の知識人で、国際的な文化人というような、都会的でやや取り澄ました感じの「聖人君子」の顔の「文豪」ではなくて、実は、頑固とさえ見える一徹さと、太々しいとも思える強靱な神経、野生味を具えた「戦後作家」井上さん、つまり井上さんの実像の一部であったのだが、そしてその一部の方にこそ井上さんの真骨頂があるのだと思うのであるが、どうやら手法を誤ったようで、企図は成功しなかったようだ。

いずれ他日稿を改めて、この企図に副ったもつと明快な分析・解説を行いたいと思う。

（参考文献）

巖谷大四・近藤信行監修『井上靖の世界がわかる本』現代出版情報研究所
長谷川泉著『井上靖研究』南窓社

『群像日本の作家・第二〇巻・井上靖』小学館

福田宏年著『増補井上靖評伝覚』集英社